

19 シヤント血管自己管理シートを用いた指導による患者意識・行動変化調査

JA 長野厚生連南長野医療センター篠ノ井総合病院

人工腎センター看護部¹⁾ 臨床工学科²⁾ 腎臓内科³⁾金子瞳¹⁾ 山崎友希¹⁾ 山田律子¹⁾ 齋藤真美¹⁾ 佐藤ともみ¹⁾河野玲司²⁾ 山田裕也²⁾ 丸山和葵²⁾ 北村健太郎²⁾栗原重和³⁾ 穴山真理子³⁾ 竹前宏昭³⁾ 牧野靖³⁾

【背景】

当院の透析導入患者への指導では、患者本人がシヤント自己血管を「観る・聞く・触る」を行い、毎日観察することを基本とし、異常があればできるだけ早く報告するよう指導している。

2023年11月ウロキナーゼ製剤の出荷停止を受け、血栓によるシヤント血管閉塞の予防、およびシヤント血管管理・保護の観点から、患者自身によるシヤント血管自己管理の重要性を改めて見直す必要が生じた。患者のシヤント血管自己管理をより適切に支援できるように、臨床工学技士と協働し、「シヤント血管自己管理支援シート」(以下：自己管理シート)を作成した(図1)。患者が簡便にシヤント開存確認を行うために、シヤント血管の触診法を主体とした自己管理方法を指導した。結果、シヤント血管の触診法の実施患者は増加したが、聴診器による聴診の重要性が薄れ、触診法のみで管理を行う患者が増加した。

米田らは、「透析患者にとって、シヤントは透析治療を行うために必要不可欠なものであり、命綱である。また、その開存率は日々の管理方法により影響されるため、シヤント機能の観察方法を確立することが重要である」¹⁾と述べている。

患者が触診法と聴診法の両方の重要性を理解し、シヤント機能を維持できる適切な管理支援が必要

であると考え、今回自己管理シートを改訂し指導を行った。

【目的】

改訂した自己管理シート(図2)を用いた指導を行い、患者が触診法と聴診法の両方を実施することの必要性を理解できるように支援する。それにより、シヤント管理に対する患者の意識が向上し、行動変容に繋がることを目的とした。シヤント自己管理目標は、触診法は1日3回シヤント吻合部を触れること、聴診法は1日1回聴診器を使用しシヤント吻合部の音を聴くこととした。

【方法】

1. 研究対象：当院人工腎センターに通院し、アンケート記載が可能である患者 204名
2. 研究期間：2024年9月～12月
3. 研究場所：南長野医療センター篠ノ井総合病院人工腎センター
4. データ収集方法：アンケートは選択式とし(図3)、自己管理シートを用いた指導前と指導3か月後で両方の回答を得られたものを有効回答とし、集計した。
5. データ分析方法：McNemar検定、カイ2乗検定

問合せ先：金子 瞳 〒388-8004 長野市篠ノ井会 666-1

JA 長野厚生連南長野医療センター篠ノ井総合病院

(TEL 026-292-2261)

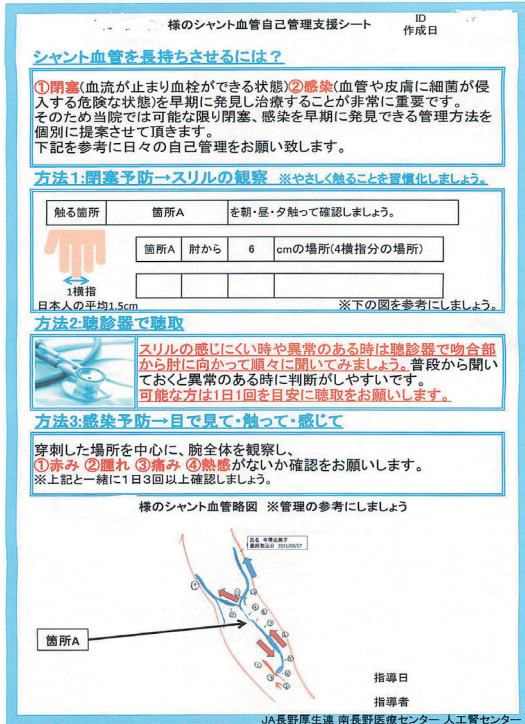


図1：自己管理シート（改訂前）

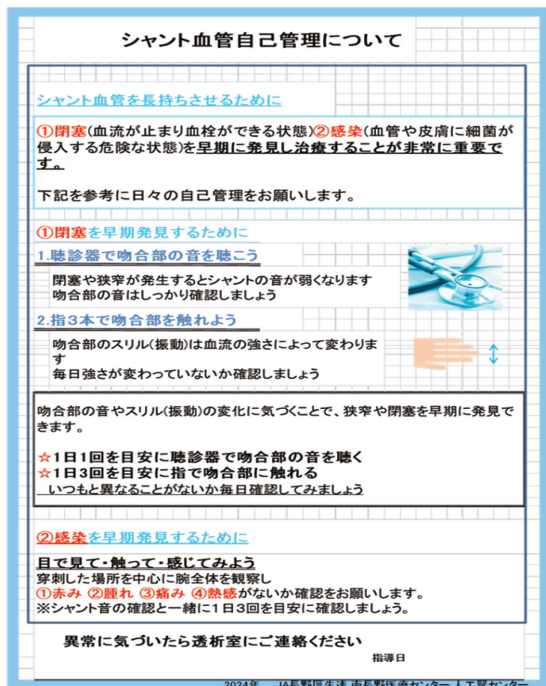


図2：自己管理シート（改訂後）

改訂前は患者個々のシャント血管走行図へ触診・聴診部位を図示したが、改訂後は統一した指導を行うために、吻合部の聴診を1日1回・触診を1日3回行うことを提示した。

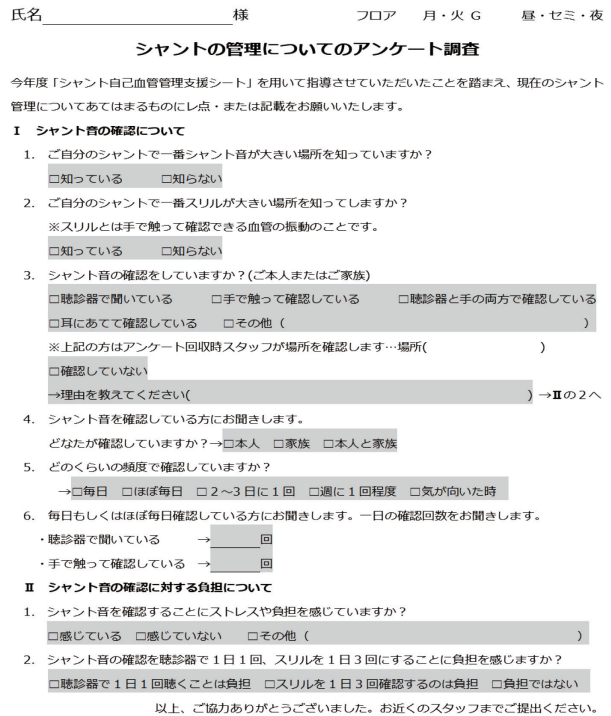


図3：アンケート用紙

【倫理的配慮】

対象者には文書および口頭にて研究目的を説明し同意を得た。なお本研究は JA 長野厚生連南長野医療センター篠ノ井総合病院倫理委員会の承諾を得て行った。

【結果】

アンケートの回収率は 82% (168 名) であった。

1. シャント音確認方法

聴診法を行っている患者は指導前 47% (79 名) から指導後 52% (88 名) へ増え、指導前後で有意差が認められた。(図 4)

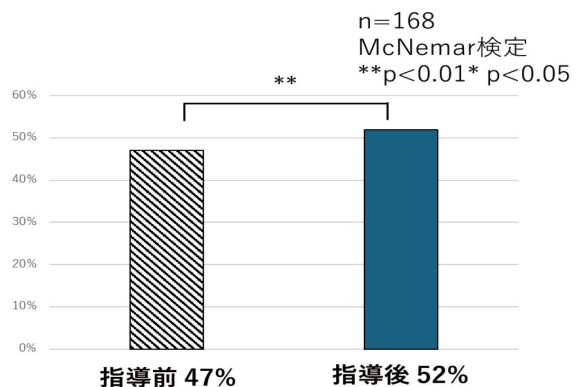


図4：聴診法を行っている患者の割合

2. シヤント音確認頻度

シヤント音を確認する頻度において、毎日確認している患者は指導前 66% (111 名) から指導後 72% (121 名) に増え、指導前後で有意差が認められた。(図 5)

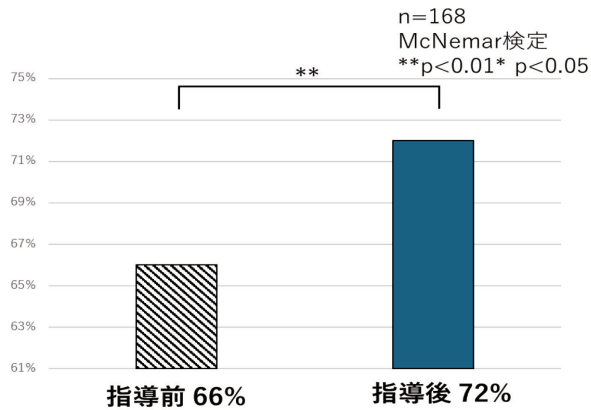


図 5：毎日シヤント音を確認している患者の割合

3. シヤント音の 1 日の確認回数

聴診法を 1 日 1 回以上している患者は指導前 46% (51 名) から指導後 53% (62 名) へ増加したが、有意差は認めなかった。(図 6)

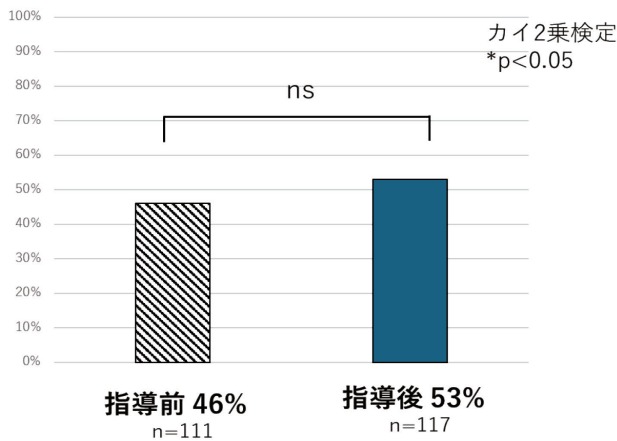


図 6：聴診法を 1 日 1 回以上している患者の割合

触診法を 1 日 3 回以上している患者は指導前 32% (35 名) から指導後 35% (40 名) に増加したが、有意差は認めなかった。(図 7)

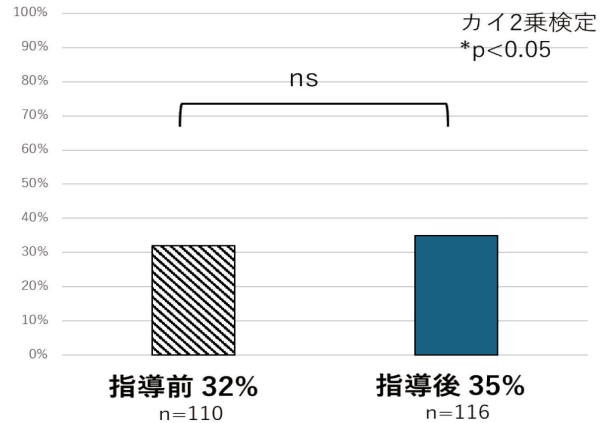


図 7：触診法を 1 日 3 回以上している患者の割合

4. シヤント管理における指導前後の患者負担

指導前の聴診法、触診法いずれかの方法でシヤント管理している 66% (111 名) のうち、負担に感じている患者は 8% (9 名) であった。(図 8)

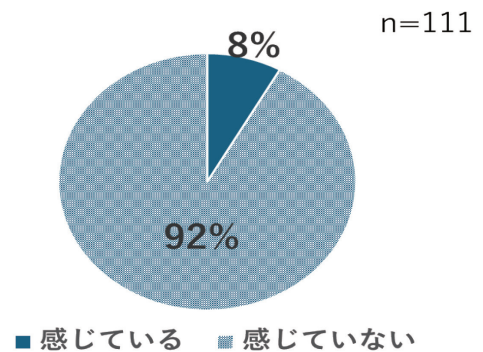


図 8：シヤント管理している患者の負担 (指導前)

負担と感じている患者からは、「聴診は面倒くさい」「看護師や技士が透析時間いてくれるから必要ない」「今まで触診だけで問題なかった、聴診器必要ありますか?」「耳に吻合部を当てると大きな音が十分聞こえるから聴診器は不要」などという言動があった。

指導後指導通りシャント管理できている患者は12% (20名) であり、シャント管理できていない患者は86% (145名) だった。指導通りシャント管理できている患者のうち、シャント管理を負担に感じている患者は15% (3名) だった。指導通りシャント管理できていない患者は、聴診法への負担が22% (32名) と最も多く、聴診法と触診法の両方が負担である患者14% (20名) と合わせると36% (52名) の患者が聴診法を負担に感じていた。指導通りシャント管理できている患者の負担と、指導通りシャント管理できていない患者の負担の比較では有意差が認められた。(図9)

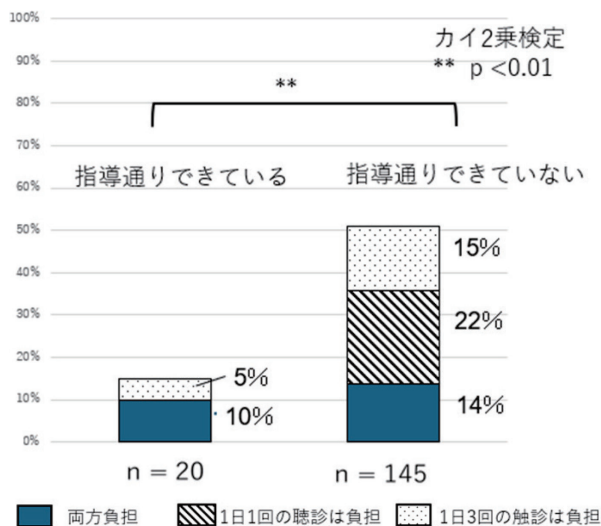


図9: 指導通りシャント管理できている患者と指導通りシャント管理できていない患者の負担の比較

【考察】

シャント音の確認方法では「聴診法を行っている患者」、シャント音を確認する頻度では「毎日シャント音を確認する患者」において指導前後で有意差あった。改訂した自己管理シートに基づいた指導を行い、聴診法の必要性を患者が理解したと考える。しかし、シャント自己管理目標の1回/日聴診器を使用しシャント吻合部の聴取、3回/日

シャント吻合部の触診が行えた患者は12% (20名) のみであった。その背景には掲示した目標に対して負担に感じている患者が51% (74名) いたことが理由に挙げられる。また、自己管理シート改訂前の触診法を主体とした指導では、92% (102名) の患者がシャント管理に負担を感じていなかった。しかし、改訂後の指導にて聴診法が負担と感じている患者が36% (52名) と最も多く、また、聴診法に対する患者の言動から、これまで聴診法の習慣がなかった患者が聴診法を生活の中に組み込むことは、時間が必要であると考えられる。今回の取り組みにて、指導通りにシャント管理できている患者85% (17名) は「負担がない」と回答していることから、一部の患者においてはシャント管理が生活習慣の一部になったと考える。

今回の指導期間は3ヶ月と短期間であったため、患者の意識・行動変容は困難であった。患者のシャント管理の定着化を図るには長期的な継続した関わりが必要である。定期的にシャント管理方法を確認し、できたことは認め、再指導を行うことで、患者の自己管理意識を維持・向上させていくことが大切であると考え。シャント管理への負担感では有意差があったことから、自己管理シートを用いた一律の指導だけでなく、患者が負担と感じている理由を把握し、患者の生活背景として生活環境や患者の生活をサポートできる家族の有無や、患者の自己管理の思いに合わせた指導方法を検討することが必要である。患者のシャント管理方法についてはスタッフ間で情報共有を図り、患者の指導への反応や状況を確認し、患者が理解し実践できるような支援の継続性が重要であると考える。

【結語】

自己管理シートを活用し触診法と聴診法の両方を行う指導を実施したが、触診・聴診の回数を増

やすことは患者にとって負担となり、シャント管理の意識及び行動を変えることは不十分であった。患者が適切なシャント管理を確立するために、個別性のある継続的な関わりが必要である。

【COI 開示】

本論文において開示すべき利益相反関係にあたる企業等はなし

【引用文献】

1) 米田隆史, 高木朋子, 土屋孝子 他. 透析医療におけるシャント閉塞予防への取り組み. 日農医誌 65 巻 1 号: 98~102, 2016

【参考文献】

・臨床透析編集委員会: バスキュラーアクセス - 作製・管理・修復の基本方針 2nd Edition、臨床透析 7 月増刊号 Vol. 38 No. 7, 2022

・河野玲司, 山田裕也, 北村健太郎 他. vascular access (VA) ロスを防ぐために - 触診による自己管理方法の検討 -. 腎と透析 Vol. 97 別冊アクセス: 188-190, 2024

・松本智美, 古賀明美, 熊谷有記. 自尊感情が慢性透析患者の自己管理行動に及ぼす影響. 日本看護研究学会雑誌 Vol. 41No. 1: 29-35, 2018

・四十竹美千代, 若林理恵子, 八塚美樹. 長期透析患者の心理状態から自己管理への援助を考察する. 富山大学看護学会誌 第 10 巻 1 号: 29-36, 2011